
魔法少女リリカルなのは～選ばれなかった転生者～

朝人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは～選ばれなかつた転生者～

【NZコード】

N8756

【作者名】

朝人

【あらすじ】

転生 それはアニメやゲーム、マンガや小説といった物が好きな人なら大半が憧れる物だろう。

だが、それを望まず、ましてや神の手違いでもなんでもなく、本当に偶然急死し転生してしまった少年。

彼は、自分が「転生者」だと知ったのは転生してから数年経つたある日、大事な者を失つた後だった。

注意 これはなのはの一次創作であり、転生、オリジ、R15といつた物が入っています。こういった物が苦手な方はお手数ですがお戻り下さい。

プロローグ

少年は物心ついた頃から、頻繁に不思議な夢を観ていた。

記憶に無い場所、記憶に無い家族、記憶に無い友達、記憶に無い知識、記憶に無い日常……それは全て夢となつて、知らず知らずの内に少年の記憶と同化していった。

最初こそ戸惑っていたが戸口が絶えにれ
夢に対する認識かどん
どんと鈍化していき、つい最近まで「またか」程度にしか思わなく
なつてきていった。

その夢が、自分の前世の記憶とも知らずに……。

そして少年が五歳の時、それは起こつた。

ちまち辺りは地獄へと変わつた。

身体中を痛みが走り、重く感じたが、それでも生きていた。

れていた瞼を開き、辺りを確認しようとする。

だが、少年が最初に見たのは瓦礫と化した店内ではなく……。

首を失い、身体がバラバラにされてまで自分を守つた……。

変わり果てた母の姿だつた。

母が亡くなつた後、父も追う様に事故で逝つた。父は管理局の技術部に所属していた事もあり、自分専用のデバイスを残してくれたが……。

それからは一人だつた。

兄弟も、親族もいなし、文字通り天涯孤独になつた。
前世の記憶が戻り、自分が転生者と知つた少年は神を、世界を……
そして、力の無い自分を憎んだ。したくもなかつた転生をさせられただけでなく、幼くして両親を奪われた悲しみは想像を遥かに絶した。

それからという物、少年は取り憑かれた様に『力』を求めた。
魔力ランクはD、一般の子供より高かつたが、それでもたかが知れてた。

半年程特訓をし、ある日自分にレアスキルがある事が分かつた。少年は前世の知識も使い、レアスキルを最大限使える様に試みた。

「ふぎやッ！？」

その結果、少年は壁にめり込んだ。
それはもう見事な、ちゃんとした人形ひとがたが残る程に。

少年のレアスキルは扱いが酷く難しく、更にその一回でバリアジャケットがボロボロになる程の威力を持つていた。後に耐えれる様にバリアジャケットの調整を整えたが、それまた難しくこれだけで十日は潰れた。

それからは来る日も来る日も壁にめり込んで行つた。特訓が終わる

頃にはバリアジャケットはぼろ雑巾の様になっていた。

何百回か繰り返し、このスキルには高い精度の魔力操作が必要である事が分かつた。魔力を低くすれば不発、高くすれば壁へGO、まさにほどよく間隔が丁度良いのだが教えてくれる人がいる訳もなくほとんど我流に近かつた。

そんな時だつた、一人の女性に出会つたのは……。

「貴方ね、クラナガン七不思議の一つ、『壁に埋まる少年』というのは」

いつもの様に魔力を上手く扱えず壁にめり込んでいると、突如後ろから女性の声が聞こえた。

「聞いた時は只の噂だと思っていたけど、まさか本当に埋まっているなんて……」

壁から抜け出し振り返つて見ると、そこには一人の女性が顎に手を当てなにやら思案していた。

「まあいいわ。それより貴方、いつもこんな事してるの?」

「…………」女性の問いに少年は無言で頷く。

「見せて貰つたけど、貴方……魔力の扱いが下手ね」

「…………」

そんな事、女性に言われるまでもなく分かつてゐる。だから、毎日毎日壁にめり込んでいるのだ。

「もしよければ私が見てあげましようか?」

「え……?」

この時、女性は初めて少年の声を聞いた。予想していたより少し低い声だつた。

「私はこれでも魔導に長けてゐるつもりよ、私の元で修行すれば今

の数倍以上は魔導を扱える様になる、保証するわ」

これは女性のほんの気まぐれ。

物事が上手く行かず、半ば自棄になりかけていた時に見つけた魔力

の扱いがとても下手な少年。その少年を育ててみると、この鬱然とした気分を変えるには丁度良いかも知れない。

唯の氣分転換。魔女はそんな風にしか思っていなかつた。

「…………

だが、少年は違かつた。

少年は彼女を知っている、『大魔導師』と謳われた彼女の事を……。

「…………分かつた」

故に、それは少年にとつて願つてもない事だつた。

だから、少年は決断した。

強くなる為に。

『力』を手に入れる為に。

「よろしく頼む、プレシア・テスタークサ」

例え、『転生者（自分）』という存在が加わる事で世界がどう変わつてしまおうとも……。

プロローグ（後書き）

はじめまして、朝人と申します。

今回、「小説家になろう」で初書きしました。小説は趣味で結構書いていますが、「転生」物は初めてです。至らない所もありますが、よろしくお願いします。

「……ん」

「じさつぱりした部屋のベッドの上で、少年 クオルガ・ヴァイサーは目を覚ました。

灰色の髪を手で搔き、翠色の瞳がまだ眠そうな瞼から垣間見えた。

「…………はあ…………」

身体を起こした後ベッドから降り、適当なコップに水を注ぐと、喉が乾いていた事もあり、一気に飲み干す。

「…………久しぶりに懐かしい夢を見たな…………」

先程見た夢 ある意味、自分にとつての始まりとも呼べる時の事を思い出し、苦笑する。

あれから四年。

クオルガはブレシアの元で修行した。

魔力が低く、更にレアスキルの特異性によりクオルガの修行は至難を極めた。

レアスキルの正常な発動 これだけで半年は潰れた。

それから三年も経ち、魔力もDからBにまで上がる事が出来たが、未だにレアスキルは完全に扱い切れていない、せいぜい8割と言つたところだろう。それ程までに彼のスキルは扱いが難しかった。

ちなみに、クオルガは一朝一夕で覚えられる様な天才ではない。この四年間、文字通り血と汗と涙を大量に流して、ようやくここまでになれたのだ。…………まあ、ほとんどが壁にめり込んだ際に流れたのだが…………。

色々と苦労した四年間を懐かしく思い返していくと、不意にクオルガの前にモニターが現れた。

「クオ、 ちょっといい？」

そこに映っていたのは綺麗な金色の髪をツインテールにした、紅い瞳の少女 フェイト・テスタークサだった。

「どうした？ フェイト」

「うん、 母さんが呼んでるから……」

ちなみに、「クオ」とはクオルガの愛称である。出会ったばかりのフェイト（五歳）は「クオルガ」と呼ぶのが難しかったらしく、気がつければ「クオ」と呼ばれる様になり、以来彼の愛称となっている。

「そりゃ、 分かった」

「じゃあ、 先に行ってるね」

通信が切れると、クオルガも準備を始める。
と言つても、黒い上着を羽織るだけなのだが……。本来はここにデバイスも入るのだが、生憎と今は強化している最中で手元には無い。父の形見でもある為常に持つていいが、その事に拘り過ぎていざというときに使えなかつたら話にならないし、父もそれは望んでいないだろ？。

「そろそろあの時期か……」

準備を済ませ、部屋を出る。

かなり時間が経つた影響で劣化しているが、前世の記憶を呼び起こそ。無論、足は目的地に向かっている。
間違つていなければそろそろ『始まる』はず。

「……という事はご同類が出て来るか……」

頭に浮かんではるのは「チート」や「ヒオーバー」という文字。

それだけでも嫌になるが、クオルガが一番危惧している事は一つ…

…。それを考へると次第に足取りが少なくなり、最後には止まってしまった。

「……高町　なのはと“お話”だけはしたくないな……」

不意に「なのなの」言いながら桜色の砲撃を放つ少女が思い浮かんだ。

その少女と“お話”する可能性があるかと思うと、自然とため息が漏れた。

「あ……クオ」

扉を潜るとそこにはフェイイトとプレシアが居た。

「三分の遅刻よ、クオルガ」

『玉座』と言つてもいい様な椅子に座つていたプレシアは不機嫌そうに顔をしかめていた。

「悪い、少し手間取った」

それに対し、クオルガは余り顔色を変えず謝罪だけする。

「……時間計つてたんだ、母さん……」

母が意外とマメであるという事を、新たに知つたフェイイトだった。

「まあいいわ、それよりもコレを見てちょうどいい

三人の丁度中に一つの画像が現れた。

それは青いひし形の宝石だつた。

「クオルガは知つているはずだから、貴女にだけ説明するわね、フェイイト」

「はい」

何故クオルガが知つているのかは聞かず母の言葉に耳を傾ける。クオルガは偶にプレシアですら知りようのない事を知つていて、それが気になり直接本人に訊いてみた事があるが軽くあしらわれて終

わってしまった。その後も懲りずに何度も訊いてみるが返答は変わらず、あまりにしつこかつたので最後には怒つて三日間程口を利いてくれなくなつた。その時は一日中謝り倒してなんとか許して貰つたが、以来フェイトは絶対にその事には触れないと心に決めたのだった。

ふと、そんな事を思い返しながらもプレシアの説明を逃さず聞く。そんなフェイトの姿を横目にクオルガはため息を一つ。

(さて……どうなるか)

自分と『彼女』以外の転生者にはまだ会つた事はないが、『自分』と『彼女』いうイレギュラーが存在しているのだから、他にもイレギュラーな存在がいるはず。クオルガはそう考えていた。曰く、自分の身に起きた事は他人にも起きる。

(……これじゃあ、まるで病気だな)

そう思つて苦笑すると、一度プレシアの説明が終わつた。

プレシアからの説明を纏めると……。

- ・画像にあつた宝石は『ジュエルシード』と呼ばれる次元干涉型のロストロギア。
- ・そのロストロギアが輸送中何らかの事故で、ある管理外世界に飛び散つてしまつた。
- ・その管理外世界が思つてたよりも近く、もし暴走してしまつた場合被害が出るのは確実。
- ・その前に封印して、蒐集していく。

「て、いう事でいいんだよね？ クオ」

「ああ、大体そんな感じだ」

プレシアからの言われた内容を改めて復習し、すぐ隣にいたクオル

ガに確認を取ると「合っている」という返事を貰つた。

二人は今、ポーターに向かつて移動していた。

その後プレシアはすぐにジュエルシードの蒐集に行く様に命じ、フェイ特はそれに応じてすぐに行動に移した。

病で動けない母の為という事もあるが、フェイトは基本的に優しい。現地の人達の事も案じているのだろう。

その性格から戦いには向いていないとは思うが、才能がそれを邪魔する。おそらく彼女が魔法と縁を切るのはかなり難しいだろう。

「……クオ？」

「ん……？」

気がつくとクオルガ達は既に目的地に着いていた。

「大丈夫かい？」

その証拠に、先に着ているはずのアルフがいた。心配そうに見ている一人。

ついに「始まる」事もあり、最近のクオルガは気がつけば考え方をする様だ。

「何でもない、少し呆けていただけだ」

これからは気をつけるとしよう、そう思いながら返事をする。

「そう？ ならいいんだけど……」

それでも気になつたらしく表情を伺うが、いつも通りの仏頂面に戻つていて分からなかつた。

「はあ……」

納得出来ない、という顔をしているフェイトにクオルガはため息混じりで近寄ると右手をフェイトの頭目掛けて動かす。

「く、クオ……」

思い浮かんだのは、テレビとかでよく見る頭をなでるという行為、

それを考えると次第に顔が熱くなつて戸惑つ。だが意を決し、目を瞑る。

そして、フェイトに……。

「イタ……！」

デコピンを喰らわせた。

それはもう、凄く良い音のする程のを……。

「さつさと行く準備をしろ」

それだけ言うとクオルガはフェイトから離れた。

…… そうだ、クオルガはこういふやツだ。どんな相手でもあまやかすや褒めるといった事はほとんどしない。それが家族同然に育つた相手だとしても、だ……。

「……期待した私のバカ……」

そんなクオルガの性格を忘れ、「もしかしたら、なでてもらえるかも」と僅かでも期待した数秒前の自分を恥じた。

フェイトのそんな姿を見たアルフは「ファイト」と小さく応援していた。

数分後。

ポーターに座標を入力し起動する。既に向こうでの手配は済ませてあるので、あとは行くだけだ。

「先に行つてるね、クオ」

デバイスの調整が終わつていないクオルガは後で合流する事になっている。

「待て」

「え……？」

ポーターの陣に入る寸前、クオルガが呼び止める。

その様子を見ていたアルフは何を思ったのか、主より先に行つてしまつた。

「コレを持っていけ」

振り返つたフェイトにある物を投げ渡す。

「コレは……？」

それは綺麗な銀色のブレスレット、サイズ的にフェイトにピッタリの物だった。

「魔力をジャミングする物だ。管理外世界とはいえ、念を入れるに越した事はない」

「ありがとう……クオ」

いつも仏頂面で冷たいのにこういう所はしつかりとしている、考えてくれる。こういう所があるから多少邪険にされようとも頼れるし、慕えるのだ。

……もつとも、当の本人は面倒事を起させない為、としか考えていないのだろうが……。

「それとプレシアからの伝言、『無茶はするな』」

「あ……うん」

プレシアからの伝言を聞くとフェイトは嬉しそうに微笑む。数年前までは決して良好とは言えない母との関係だったが、クオルガのおかげで最近は良くなつて来ている。現にクオルガを介してだが、こうしてフェイトの身を案じていた。

「いってきます」

そして、フェイトはアルフの後を追い、陣の中へと消えた。

「……そんなに心配なら、アンタが直接言つてやればよかつたのに」

フェイトが消えて行つたポーターを見ながらクオルガは言葉を放つ。それに応える様に通路の角からプレシアが現れた。

「そうすればアイツはもつと喜んだろうに……」事実、伝言だけであれほどなのだ、本人に直接言われたら顔がふにゃけるのではないだろうか？

「大きなお世話よ……」

確かに、クオルガのおかげでフェイトとの仲は良くなつて来ているが、それでも今までフェイトを行なつてきた行為は許せる物ではないし、今下手に声を掛けプレッシャーを与える訳にもいかない。そんなプレシアの姿にクオルガは「やれやれ」とため息混じりに首を振る。

「そんな事よりそろそろ時間よ」

話を逸らす為に言つた様に思えたが……確かに、そろそろ修行の時間がだつた。

「ああ、それじゃあ今日も頼む」

そして、クオルガはプレシアと共に訓練室に向かつた。

一話（後書き）

題名が思いつきました……。お、なんとか、これからもサブタイトルは話数だけになると感じます。

1話（前書き）

一話を編集・追加した為四ページに増えています。
まだ見ていない方はそちらを先に読んでから一話を見て下さい。
お手数をお掛けしてすみません。

クオルガは今、ある場所に向かつて歩いていた。

フェイントとアルフが発つてから一日、ようやくデバイスの最終調整が終わつたと『彼女』から連絡が来た。

特訓を終え、軽く汗を流した後『彼女』の元へと向かつ。

歩くこと数分。

よひやく『彼女』が待つてゐる部屋へと辿り着く。

「……それにも、無駄にデカいな」

同じ建物の中にあるのにこんなに時間が掛かるとは……『時の庭園』

恐るべし。

「て、なにバカな事考えてるんだ……」

頭を振り、今思い浮かんだ事を奥底へと沈める。

「……入るぞ」

確認を取る暇なく中に入る。

「きやああああ～～～！～～～？～～～？～～～？」

次の瞬間、とてつもなく大きな悲鳴が『時の庭園』に響き渡つた。
そこに居たのは、長い水色の髪を結わえた九歳程の少女だった……

下着姿の。

「つむさい、黙れ」

しかし、クオルガは謝罪すらせず、短く切り捨てるそのまま部屋の中へと入つていく。

「ちょっとー？ 女の子の部屋に無断で入らないでよーーー！」

許可なく入られた事に、少女は怒りを露にする。

「……いつからデバイスルームは女の子の部屋に変わった

もつとも、そこは彼女の自室ではないのだが……。

「それでもー！ 僕だって女の子なんだよーーー！」

「前世男で現世露出狂だがな」

そう『彼女』いや『彼』？ が、現在クオルガが知る唯一の転生者、クリア・リトラである。

「前世男なのは認めるけど、露出狂じゃないよーーー！」

流石に、前世の性別については今更どうする事も出来ないので仕方がないが、変質者扱いだけは嫌だつた。

そんな今の格好と矛盾している事を言つてはいる彼女に、クオルガはため息混じりに問う。

「では訊くが、最後に服を着たのはいつだ？」

ちなみに、ここで言つ『服』とは下着以外を指す。

「えーーと、確か……」

記憶の海から『最後に着た日』の事を思い出し、声にする。

「一ヶ月前」

「…………」

これには、流石のクオルガも言葉を失つた。

何せ、一ヶ月もの間彼女はずつと下着姿で生活していたのだから……。

確かに、外出などはほとんどしない彼女だから服装云々で余りキツい事は言わないが……それでも、仮にも『女の子』と言つながら、服を着ろ！ 羞恥心を持て！！

……そう言いたかったが……。

「……どうか、よく風邪引かなかつたな」

悩んだ末、ようやく出せた言葉はそれだつた。

室内とはいえ、一ヶ月もあんな薄着で過ごしていいたのに風邪を引いていない事は確かに凄いが、言いたかった事はそれではないと若干後悔した。

「それでどうしたの？ クオ」

「ん……？」

「何か用があつたから来たんじよ？」

『下着の上から白衣を羽織る』という、ある意味では斬新なスタイルをしたクリアは恥じらつ素振りもなく、そのままの姿で椅子に座つた。

やはり、先程の悲鳴は演技だつた様だ。分かつていていた事とはい精神的な疲労を感じたクオルガだつたが、これ以上無駄な問答をしない為にも用件を言う。

「デバイスの調整は？」

「ん、両方とも準備万端完璧OKだ」

無駄に良い笑顔でデスクの上に置かれていた懐中時計をクオルガに渡す。

「……セットアップ」

受け取ると確認の為、デバイスを起動する。

すると、黒の薄いロングコートのバリアジャケットを纏う。腰にはベルトがあり、更にそこから左右対称になる様に二つのベルトが前から後ろに若干垂れて繋がつていて、そのベルトにはカートリッジが各二つずつ付いており、後ろには銀色の銃がホルダーにセットされていた。

黒いグローブが着いた手を何度も閉じたり開いたりもする。その後、ホルダーから銃を抜く。

「銃型インテリジェントデバイス ダリア。キミのオーダー通り出来たと思つけど?」

クリアの言葉を聞きながらも銃 ダリアを持ち、重さや強度を確かめる。

「少しデカくないか?」

構えたそこで大きさについて問う。

予想していたのより少し大きかった。

「それは仕方ないんだよ、プレシアさんが張り切つたせいで最大出力が予想以上だつたんだから。耐える為には強度を上げる必要があつた、結果として当初より大きくなつたんだ」

「……なるほど」

説明を聞き、クオルガは納得する。

確かに予想より大きく、慣れるのに時間が掛かるかも知れないが、それでも『使用中に壊れる』といった不安要素が一つなくなつたのならばそれでいい。更に予定よりも出力が上がつてたのなら、それは嬉しそう誤算だ。

『申し訳ありません、マスター』

そこで今まで沈黙を保っていたダリアが言葉を発した。

どうやらAIは女性型らしい。

「気にするな、ダリア。それで、カートリッジの方はどうだ?」

ダリアに一声掛けると、クオルガは再びクリアへと問う。

「元々本体に付いてるのを含めて、6発1セツトの計五つ

「これで全部か?」

「“普通”のならともかく、ソレは特別製だからね。一発作るだけでも相当な魔力を必要とするから……寧ろ平行作業で五つも用意出

来た事に感謝して欲しいよ」

出来れば後2、3は欲しかったのだが……。

「そうだな……後でフェイント達に礼を言おう」「闘病中のプレシアやフェイントに無理をさせたのだ、労いの一つは掛けるのが道理だろう。

「え……僕には？」

「魔力を込めたのはアイツらだろ？」「作つたの僕！！」

「お前はそれしか出来ないだろ」

「酷いよ！？ ホントの事だけど酷い！！」

実はクリア、転生者ではあるのだが、魔力資質が全く無いのだ。

それの原因は性格にあった。

クリアは生前、かなりのメカオタクだった。無論、アニメキャラなども好きではあつたが、それよりもメカが好きだった…………ガダムを嫁と言い張る程に……。

そんな『彼』が転生の際に神に言つた事は……。

『魔力やチート能力、主人公補正なんてどうでもいい！ そんな事より、メカを作れる程の知識を……技術をくれ！！』

そして『彼』は、『彼女』として……稀代の天才として生まれたのだった。

もつとも、その事が災いし様々な組織に追われる事になつたのだが……偶々近くで模擬戦を行なつていたクオルガとフェイントに助けられなかつたら今頃どうなつっていたか、性別が変わつた事もあり想像するのも嫌だつた。

そして現在、『時の庭園』のメカニックとして生活している。万が

一に備え、庭園の要塞化も実行しているらしい。……本人の趣味含めで。

「酷いよクオ！！ 確かに僕、作る事しか出来ないけど……でも、『ありがとう』くらい言つてくれてもいいじゃないか！！」

「……？ 何か勘違いしている様だから言つが、俺はお前に感謝しているぞ」

「……へ？」

クオルガの予想外の言葉にすっ頓狂な声を上げるクリア。

そんな彼女を横目に、デバイスを待機状態の懐中時計に戻す。

「……お前が居るから、父さんの形見であるコイツを調整出来るし、仮に壊れても直してくれるだろ？ からな、だから感謝はしてね」

「……クオ……」

その言葉にクリアは感動し、抱き着こうと前動作をする。

「技術者としてはな」

だが、この言葉で全てが台無しになつた。

「やつぱりか！？ 薄々そうじやないかと思つてたけど、やつぱりそつちなのか！！」

“あの”クオルガが珍しく素直だと思つたら、やつぱりそうだった。クオルガ・ヴァイサー、人の努力を認める事は少ないが技能 スキルは認める男。

「感謝はしてるぞ」

「僕のスキルに対してもよね！？」

「ああ」

さも当然、と言わんばかりに頷く。

「うわああああああああん！！！！？ クオの馬鹿ああああああ

あああ――――――

その言葉が止めとなり、クリアは泣きながらデバイスルームを出て行つた。

「……褒めたのに、何故罵倒されなきやならないんだ……」

『……挫けずに頑張つて下さい、マイスタークリア、……』

残されたクオルガは、褒めた（自分的には）はずなのに何故あんな事を言われたのか解らず、ダリアはクリアの心情を知った上で小さく応援した。

一話（後書き）

一話でオリキヤラ一人目……たぶん、まだ増えるかも……。

誤字脱字等がありましたら教えて下さい。

クリアがいなくなつた後、クオルガは『スクの上に置いてあつた黒いブレスレットを持つて部屋を出た。

「……もう一つ、聞きたい事があつたんだがな」

父の形見であるデバイスの『ある事』について訊く事があつたのだが、いなければ仕方ない。

「また今度、だな」

ブレスレットを左手首に着けると、そのままポーターに向かつて歩いていく。

「何処へ行くんですか、クオ」

暫くすると後ろから声を掛けられた。

振り返るとそこには、原作では既にいなのはずのリースがいた。無論、これはクオルガが介入してしまつた所為である。

「デバイスの調整が終わつたからな、フェイト達と合流するつもりだ」

「今から、ですか？」

「ああ」

気になつてゐる事もあるので、どのみちそろそろ向かう予定だつた。最悪、デバイスがなくても……。

「ブレシアには……」

「お前が伝えてくれ。一々戻つてからまた來るのが面倒だ」
ブレシアの私室は今向かつてゐる所とは真逆の方向にあつた。わざわざ『行つてくる』という言葉を伝えに向かうというのは手間が掛かる。

リースは現在、ブレシアの看病に徹している為必ず彼女の元に向か

うだらう、ならついでに自分の事も伝えて貰えればいい。

「わかりました。では、プレシアには私から伝えます」

クオルガの意図が分かつたリニスは頷く。

「あ……そういうえば、先程クリアが泣きながら走つて行つたのですが……何かあつたのですか？」

偶に見る光景なので今まで余り氣にしてはいなかつたのだが、丁度目の前に関係がありそうな人物が居るので、興味本意で訊いてみた。

「ああ、実は……」

そこでクオルガは先の一件を話し始めた。

「……と言う訳なんだが、どうして罵倒されたのか未だに分からない」

あらかた説明し終えたクオルガは、その時の事でも思い出したのだろう、腕を組み考え込んでいる。

「…………」

対してリニスは、何も言えずにいた。

一応、クオルガは他人の好意というのに疎くはない。フェイトやクリアが自分に『好意』を向けている事も分かっている……ただ、それが『（イコール）『恋愛』に結びつかないだけである……。

クオルガは他の転生者とは違う。

本来このタイプの転生は、転生しても記憶と人格は引き継がれる物だ……しかしクオルガの場合、人格はこちらで新たに生まれた物を、記憶は夢を介しての『同化』という稀にすら見ない例であり、記憶は持つっていても前世とは完全に別人となつているのだ。

おそらく、前世の性格なら気付けるのだろうが、なにぶん現世では生きた時間の半分を『魔導』と『力』の向上にのみ費やしたのだ、そういう感情に疎くなるのはある意味当然とも言える。

(……ご愁傷様です、クリア)
クオルガに対し、僅かでもそんな期待をしてしまったクリアに同情するリースだった。

「……と、じゃあ俺は行くからな」

「あ……はい、気をつけて」

また考え込む前に正気を取り戻したクオルガは、リースに軽く言うと転送ポーターへと向かった。

遠見市。その外れの森の中に一つの魔法陣が浮かび上がる。

「……人目が付かない場所だというのは予想していたが……少し遠いな」

その陣の中から出て来たクオルガは、現在地と目的地までの距離を考え、一人呟く。

「まあいい、歩いて行けない距離じゃないからな……」

幸いにも町が見えるという事はそれ程距離がある訳ではないはず、そう思い移動を開始しようとすると……。

「……その前に一仕事か」

ため息混じりに呟くと同時に、森の中から凄いスピードで現れた巨大な物体がクオルガを丸呑みにした。

それは何処にでもいる普通の蛇だった、体長1m程の普通のシマヘビ。

そのシマヘビは何時も通りに生活していた。

何時も通りに森を詮索し、獲物を見つけ、そして狩りを行った。

……ただ、それだけのはずだった。

狙つた獲物 そのネズミが、『ジュエルシード』という、とんでもない代物を持つていなければ……。

クオルガを襲つたのはその『彼』だった。

何処にでもいる普通のネズミ……唯一違う所といえば、その大きさだろう。まるで怪獣を連想させる程の巨大な身体。

『彼』はジュエルシードの力により、『狩られる存在』から『狩る存在』へと変わった。

そして、『彼』はまた狩つた。

あまりの体格差に、今まで逃げる事しか出来なかつた、あの『人間』を……。

さまあみる……。

もし『彼』が言葉を解する事が出来たのなら、こう言つたかもしけない。何せ普通は思わないだろう、ネズミが人を襲うなど……。そして、普通の人間ならきっとその通りになつたのだろう……。

もつとも、『彼』が襲つた相手は『普通』ではないのだが……。

「手間が省けたな」

声が、文字通り『頭上』から聞こえた。

見ると、そこには銃 ダリアを構えて佇んでいるクオルガの姿があつた。

「そういえば、試射がまだだつたな」

まだダリアの『起動』しか行なつていらない事を思い出し、『ジュエルシード』の蒐集ついでに威力でも見てみるか、とクオルガは呑氣に考えていた。

対して『彼』は混乱していた。

確かに、あの時『狩った』はずだと。

動いた気配等全く感じなかつた。確かに、仕留めたはずだと。しかし、クオルガは現に『彼』の頭の上にいるし、口の中に肉の感触は感じられない。

ならば！！

『彼』は激しく身体を動かすとクオルガを振り落とした。クオルガ自身、特に慌てた様子はなく、冷静に判断し地面に着地する。

「ん……？」

だが、それと同時にクオルガの足下に円形の影が一つ。

それは徐々に大きくなる、上を見ると『彼』が全体重を掛け、巨大な顎を開きながら落ちて来た。

そして、地響きとともにクオルガを喰らう。『彼』が落ちたその一帯はクレーターの様に沈んだ。

流石に、これなら『狩れた』だろう。

口の中は石や砂利だらけで肉があるかは分からない。しかし、今度こそ逃れる隙はなかつたはず……。

そう思った『彼』は、地面に埋まつた顔の下半分を出す。

そして、この『相手を倒した』と思つた隙を突かれた。

『burst shot』

機械的な女性の声が聞こえた直後、『彼』の顔面に巨大な爆炎が舞う。

『彼』は、一体何が起きたのか解らないまま意識を失った。

次に『彼』が目を覚ました時には、『彼』は普通のネズミに戻っていた、先程までは夢だと思った『彼』は何時も通りの日常を開いた。

「確かに、予想以上だな」

ジユエルシードの蒐集を終え、フェイト達がいるマンションに向かう途中、クオルガはダリアの予想以上の威力に喜んでいた。

「流石、というべきか…… A A A 以上の魔力は
……彼なりに、ではあるが……。」

二話（後書き）

一応、戦闘シーンがありました。上手く書けたか自信がありませ
ん……。

誤字脱字等がありましたら教えて下さい。

5000Pの越えの雑談（前書き）

文字通り、ただの雑談です。

本編とは関係ないので、見なくても大丈夫です。

5000P超えの雑談

作者「と言つてで……PV5000&...」――ク1000超えました!?

フェイト「やつたね、クオ!（パチパチ）」

クオルガ「よつやくか……はあ……」

作者「何、この温度差!?」

フェイト「そ……そつだよ、クオ。もつと喜ぼうよ……」

クオルガ「……まあ、確かに。時期が時期なら俺も喜んだかもな……」

…

フェイト「時期?」

クオルガ「……なあ、フェイト。この話が始まってからどのくらい経つたと思つ……」

フェイト「え……えつと……」

クオルガ「正解は一週間……いや正確には15日か」

フェイト「……うん」

クオルガ「それ程の期間があつたのに、このバカが更新した話数は

？」

作者「……バカって……」

フェイト「……プロローグも入れて四話、かな？」

作者「あれ？ スルーですか、フェイトさん……」

クオルガ「つまり、単純計算しても一週間に一話しか更新出来てい
ないって事だ」

作者「し……仕方ないないだろ……色々と忙しく……」

クオルガ「黙れ、言い訳するな。バイトとかは仕方ないが……それ
以外の時、お前何してる？」

作者「えっと……ネット？」

クオルガ「書け」

作者「仕方ないだろ！！俺がいる所田舎なんだぞー、未だにバス
が一時間に一本とか、そんなふざけた場所だぞ！！ネットとかじ
やないとみたいアニメ観れないんだよーーー！」

クオルガ「観ながら書け」

作者「アホか！？ そんな事したら滅茶苦茶混沌と化すわ！！ 何
の脈絡もなく椅子に座った瞬間凄い勢いで天井にぶつかってもいい
のかーーー？」

クオルガ「その場合の被害者はクリアだな、今の所椅子に座ったのはアイツだけだからな（一話参照）」

フェイト「（想像中）…………うう…………痛そう…………」

クオルガ「…………というか、そのネタはA gel Be t sか？」

作者「Y e s、AB」

フェイト「…………？」

作者「あ、フェイトがついて来れない…………」

クオルガ「…………今度観せてみるか…………」

フェイト「？？？」

作者「と、言つて、今度はフェイトもついて来れる様にクオルガのプロフィールを…………」

クオルガ・ヴァイサー

年齢 9歳

身長 138cm

体重 32kg

髪 灰色

瞳 翠

魔力量 B

魔導師ランク A

魔力光 黒に近い灰色
レアスキル ??

備考：転生者が魔力が低く、おまけに飛行魔法も使えない。
使える魔法はレアスキルを含めたつたの三つのみ。魔導師なら大抵
誰でも使えるはずの念話すら使えない。

『魔導師』という枠組みではAランクにギリギリ届く届かないか位
なのだが、『戦闘者』としては……。

作者「こんなもんかな？」

クオルガ「レアスキルはどうした？」

作者「本編で明かしたら、正式なプロフに追記して出します」

フェイト「あれ？ クオつて飛べなかつたっけ？」

クオルガ「ああ、『飛ぶ』事は出来ない」

フェイト「でも、何時も模擬戦の時……」

作者「飛行が出来ない=空戦が出来ないって訳じゃないんだよ、フ
エイト」

フェイト「え…… そうなの？」

クオルガ「まあな、もっとここれは俺のレアスキルを使った特殊な
タイプだから、他の魔導師が同じ事をしようとしても出来ないだろ

うがな

フェイト「そうなんだ……」

作者「ちなみに、フェイトはクオルガが転生者だという事は知っています」

フェイト「うん。……クオとの秘密……」

クオルガ「ん？ 何か言ったか？」

フェイト「う、うん。……なんでもないよ……」

クオルガ「…………」

作者「さて、では今回まじれで終つて事で……」

フェイト「次はPVが10000にいつたらやるらしいです」

クオルガ「……またやるのか？ いんなのやつてる暇あつたら本編を少しでも進める」

チャキ（ダリアの銃口を眉間に押し付け）

作者「…………出来るだけ、頑張ります……」

フェイト「え、えと……」「こんなだらしない作者が書いていますが、出来ればこれからも読んでいただければ幸いです」

作者「よろしくお願ひします」

クオルガ「お前（作者）もちゃんと誠意を見せぬよ」

作者「……はい」

フロイト「あ、あはは……」

5000Pの越えの雑談（後書き）

雑談でした。

次は本編を更新します……といつか、したいです。

四話（前書き）

……なんとか、宣言通り五日以内に出来た。
短いけど……。

「ようやく着いたか……」

クオルガの目の前には巨大な高級マンションが聳え立っていた。

「…………最後の確認だ、ダリア。本当に此処で合っているか?」

『はい、マスター。頂いたデータによると、此処で間違いありません』

「…………そうか」

ダリアに確認を取るとため息を一つ。

確かに、前日にフェイトから送られた来たメールには『分かり易い』と書かれていたが……。

「何処にこんな金が……」

頭を抱えたい衝動に駆られるが、その前に納得出来た。

「…………クリア、か」

ああ……彼女なら可能だろう。

大方、ジャンクやスクラップ等を安く大量に仕入れ、それを元に何かとんでもない物を作つて売つたのだろう、基本的に彼女が作るのはこの世界では珍しい物が多いから大抵が高値で買い取つて貰えるのだが……偶に質量兵器等の、この世界では法に触れる物まで作つてしまふから少し自重して欲しい物だ。

「…………まあ、その金を使ってコイツを作つてくれたんだから、強くは言えないな…………」

手に持つた懐中時計を見つめながら、ため息混じりに呟く。

『マスター』

「ん?」

『そろそろ移動した方がよろしいかと……』

ダリアの言葉で気付き周りを見ると、行き交う人が何人かこちらを見ていた。

「そうだな……」

さすがに長く立っていた為不審に思われたのか、それとも容姿の事もあり迷子と思われたのか……どちらにしても厄介事に巻き込まれる前に移動した方がいいだろう。

そう思い、クオルガはマンションの中へと入つて行つた。

フェイト達がいるであろう最上階に着いたクオルガ。

高級だけあってセキュリティ等は固かつたが意外と簡単に入れた。それはフェイトがあらかじめ、クオルガが来る事を話していたからだ。管理人の女性に『後から来る男の子』としてクオルガの事を話し、名前や容姿等も教えていた、だからクオルガはそれを証明出来る物を出し、結果『本人』と認められた。

ちなみに、本人と証明する為に必要だったのは身分証と懐中時計デバイスだつた。

「さて、と……」

予備の鍵で部屋の扉を開ける。一応、予備の鍵なので後で返しに行かなくては行けない。

ちなみに、鍵を借りた理由はフェイト達が出掛けで今はいないからだ。

「…………はあ……」

部屋に入つて、室内を見たクオルガはため息を吐いた。

外から見ても豪華だつたが、中も本当に『高級』といった感じだつた。

ガラス張りの壁や綺麗なフローリング、マンションの部屋とは思え

ない広いスペース。

「…………子供が住むにして豪華過ぎる気がするが…………」

確かに……病で動けないならせめてそれ位はしたい、と言つてプレシアが手配したはず。

「過保護というレベルではないだろ…………」

プレシアの親バカつぶりに呆れ、ため息を吐く。
確かに、昔の様に嫌悪感を持つて接するよりは遙かに良いが……それでも限度という物があるだろう。

「はあ…………」

自然とまたため息が漏れた。

その時、ガチャヤと玄関の方から扉が開く音が聞こえた。

「フヨイトか…………」

午前中に出掛けたと聞いていたので、そろそろ帰つて来てもおかしくない時間だった。

そう思い、玄関の方を見る。

「あれ？」

だが、入つて来たのは茶髪の見知らぬ少年だった。

四話（後書き）

誤字脱字等があつましたら（ry

次こそはもうと話しを進展させたい……。

「あれ？」

部屋に入った茶髪の少年は驚いた。
そこには見た事がない少年がいた。灰色の髪に翠の瞳が特徴的な、
日本人とは思えない容姿だ。

「ん？」

その少年 クオルガが軽く首を傾げる。その後、顎に手を当て考
える。

「誰だ？」

どうやら、記憶の中から茶髪の少年について探していた様だ。だが、
当てはまる人物がいなかつたのだろう、そう判断するとクオルガは
少年に問いかけた。

「失礼しました！！」

しかし、少年は応える代わりに謝罪しての言葉を残し、部屋から出
てつた。

「……？」

残されたクオルガは結局何だつたのか分からず、再び首を傾げる。

「て、やっぱり此処フェイトの部屋じゃん！…」

だが、すぐに少年は戻って来た。しかも、何だかよく分からない事
を言いながら。

「そうだが？」

「じゃあ、アンタ一体誰だよ！…」

クオルガを指差しながら少年は問う。

「それは俺も聞きたいんだが、お前は誰だ？」

それに対し、こっちも訊き返す……と言つより、元々こちらが先に
訊いたのだが……。

「む……」

「…………」

両者の間に沈黙と重苦しい空気が流れる。

二人共知り合いの部屋に来たはずなのだが、いざ来てみればお互に知らない相手が居たのだから、当然と言えば当然だ。

二人がいがみ合っていると、不意に玄関の扉がまた開く。

「ただいま……あれ、どうしたの？」

すると、そこに両人の知り合いが帰つて来た。

「あ……フュイト、聞いてくれよ。帰つて来たら、何か変なヤツがいてさ……」

「え……変なヤツ?」

少年に言われたフュイトは慌ててデバイスを起動し、室内を見渡す。

「えつと……何処にいるの?」

「いや、目の前にいるだろ!…」

しかし、フュイトには『変なヤツ』というのが見えていなかつたらしい。

そんなフュイトの反応に、今度はクオルガを指差して言った。

「え……クオがどうしたの?」

「え、いや、どうしたのつて……くお?」

「どうして?」と首を傾げるフュイトに、少年は混乱する。話が噛み合っていない、何かがズレている。

少年が分かつたのは、それだけだった。

「……なあ、フュイト」

「なに? クオ」

そんな中クオルガは、フュイトへと問いかける。

「そいつが何なのかは大体分かつた氣がするから、置いとくとして

……そいつに俺とかの説明等はしたのか?」

「…………あ…………」

その言葉にフェイトの動きが止まる。

暫くの間嫌な沈黙が部屋に流れた、それと同時にクオルガの嫌な予感がどんどんと大きくなつていく。
そして……。

「…………忘れてた」

その嫌な予感は見事に的中した。

五話（後書き）

誤字脱字等 $\text{g}(\text{r}\text{y})$

あれ？ もしかして短かつたかも……。
つ、次こそは……！！

10000円越えの……（前編）

調子に乗って、またやってしまった……。

前回と同じく見なくとも本編とは、ほとんど関係がありません。

10000PV越えの……

フェイト「では、PVが10000を越えたので予告通り……今回も始まりました、『えらべん雑談』。司会は私、フェイト・テスター・ロッサと……」

クオルガ「俺、クオルガ・ヴァイサーでお送りします」

フェイト「わあ（パチパチ）」

クオルガ「いきなりだが、一回田とはHライ違いだなあ……」

フェイト「うん、そうだね」

クオルガ「そういうえば、こんなのをまたやつた調子に乗ってる作者はどうした？」

フェイト「え」と……裏方に回ってるって……

クオルガ「はあ……」

フェイト「そ、そんな事より、今回からこの雑談をラジオ風にするそうです」

クオルガ「無論、イメージはあるがな。なるほど、それで『同会』か……」

フェイト「うん」

クオルガ「ところで、『えりてん』とはなんだ……？」

フェイト「この作品の略称なんだって、『選ばれなかつた転生者』略して『えりてん』だって」

クオルガ「……えび んの一文字違いか……」

（ 、 、 、 ）

フェイト「…………」、作者は（本）（元）（今になつて）付いた
よひです……」

クオルガ「…………まあいい。 で、一体俺達は何をするんだ？」

フェイト「あ、うん…………なんでも、毎回ゲストを呼んで、その人達
と交えて進行して行くみたいだよ」

クオルガ「ゲスト？」

フェイト「うん。 えっと……今日のゲストは……」

? ? ? 「僕だよ……」

フェイト「え……？」

クオルガ「少し登場が早くないか、クリア」

クリア「むう……だつて、ただ待つてるだけつまらないんだも
ん……」

フェイト「え、えっと……あの、その……う」

クオルガ「そうはいっても、ちゃんと予定通りにやらないとフェイトが困つてゐだら」

フェイト「え！？ あ、ううん！… だだ大丈夫だよ？？」

クリア「うわ……ホントだ、混乱してゐよ。ごめんね、フェイト」

フェイト「う、ううん……大丈夫だから、クリア」

クオルガ「立ち直つたか？ なら、続けるぞ」

フェイト「うん……「ホン……そういう訳で、今回のゲストはクリア・リトラさんです」

クリア「よろしくね～」

クオルガ「クリアについての説明は……面倒だから、フェイトにパス」

クリア「ちょっと……！？」

フェイト「もう……クオルグ……」

クリア「相変わらず、キミは僕を存外に扱うねえ……」

フェイト「まあまあ……えっと、クリアは私達の仲間でメカニックなんだ。稀代の天才つて言われていて、クリアが作った物はその全

てが一級品と呼ばれ、凄い高値で取引されるらしいの

クオルガ「ダリアを作ったのもコイツだ」

フェイト「それからも分かる通り、デバイス等の魔法関係も出来るんだ」

クリア「もつとも、僕自身に魔力は無いから出来るのはプログラミングまでで、試運転は無理だけどね^{テスト}」

クオルガ「そこは『適材適所』と言つやつだ。魔力があるヤツに任せればいい」

クリア「じゃ、その時は任せたよ」

クオルガ「だとさ、フェイト」

フェイト「ええ！？」

クリア「いや、クオに言つたつもりなんだけど……」

クオルガ「高がBランクに何を期待しているんだ、そういう事はA AA保有者に任せると限る」

クリア「…………そういう意味で言つたんじゃないんだけどなあ……」

クオルガ「フェイト、続きを……」

フェイト「あ……うん」

クリア「無視ですか……」

フェイト「あ、あはは……そんな訳で機械には強いクリアなんだけど、ちょっと困った性癖があるんだ……」

クリア「ん？ そんなのあつたかなあ……」

フェイト「え」と……」

クオルガ「今現在のお前の姿がある意味問題なんだが」

クリア「？ ……（キヨロキヨロ）……何処が？」

フェイト「だ、だから……」

クオルガ「お前の今の格好を客観的に述べる」

クリア「下着（白衣着）だね」

フェイト「そ、そんなはつきりと……」

クオルガ「あと五、六年したら捕まるな」

クリア「ありや？ そりや困るな、どうにかして誤魔化せないかなあ……」

フェイト「あの……服を着るって選択肢は？」

クリア「ないよ、だつて面倒じゃん」

フュイト「…………」

クオルガ「確実に犯罪者予備群だな」

フュイト「……そんなクリアには、ある秘密があるんだよ」「

クオルガ「いや、苦しいだろ、その話題の変え方は…………」

フュイト「実は、クリアは転生者で、前世は男の子なんだ」

クオルガ「どうやら、何がなんでも話題を変えたいらしいな…………ま、別にいいが」

フュイト「私はよく解らないんだけど、性別が変わるって一体どんな感じなの？」

クリア「ん？ そうだね……最初は違和感を覚えるかな、何せ有るはずの物がなかったんだから」

フュイト「有るはずの物？」

クリア「それは勿論……」

クオルガ「ストップ、少しほ自重しろ」

クリア「あ～、ごめん」

フュイト「…………？」

クリア「まあ、とにかく……最初はそんな感じだったかな、後は女子用の服に対しても抵抗があつたり、味覚とかが違つたりして色々大変だつたよ」

フェイト「へえ……」

クリア「まあ、それらも年月が経つにつれて慣れてつたけどね」

クオルガ「最終的には『慣れ』か」

クリア「まあ、『僕の場合』はだけどね……あ、でも一人称だけは流石に抵抗があつたから『僕』になっちゃつたんだつけ……」

フェイト「でも、『僕』って普通男の子が使うよね?」

クオルガ「精神的にまだ男の部分があるんだろう、だから別にいいと思つが……というより、今更『私』に変えられても困る」

クリア「私、クリア　ピッチピッチの9歳です」

クオルガ「……」

フェイト「……」

クリア「やつておいてなんだけど、ごめん……僕自身、今のは無いと思つたよ……」

フェイト「え、えと……じゃあ、次は……」

クオルガ「悪いが、フェイト」

「フェイト「なに?」

クオルガ「そろそろ締める様だぞ」

フェイト「え!? 本当!?!?」

クオルガ「もつとも、作者のネタ切れ、といつだけなんだがな」

クリア「まったく、ウチのバカはもう少し他の作者（人達）を見習うべきだよ」

フェイト「それは……そうだね……」

..... () ...

クオルガ「まあ、そういう事情で今回はこれで終了だ」

クリア「今のアクセスのペースだと、次は20000かな?」

クオルガ「そうだな」

フェイト「最後に……作者やキャラクター、ストーリーについて質問等がありましたら」連絡下さい」

クリア「ネタ不足なダメ作者の為にも、お願いします」

クオルガ「そんな物珍しいヤツなんていないだろうがな」

フェイト「だ、ダメだよクオ！？ そんな失礼な事言ひやがやーー！」

クリア「いやでも確かに、確率的には低いよねえ……」

フェイト「も、もう……クリアまで……えっと……そ、それでは、今回の『えらてん雑談』はこれにて終了。次回もよろしくお願ひします」

クオルガ「こんな物でも見てくれてる人がいたら、これからもよろしくな」

クリア「それじゃあね～」

10000PV越えの……（後書き）

と、 いう事情により、 質問や意見がある人はどしどしつぶやいてください。 お願
いします。

次は本編を更新します。

六話（前書き）

自分の独自設定っぽいのが若干ありますが、気にしないで下さい。

今日は、あとがきで少し……。

高級マンションのある一室。そこに四人の人物がテーブルを囲んで神妙な面立ちで向き合っていた。

「で、これは一体なんなんだい？」

オレンジ色の長髪の女性 アルフがまず最初に口を開く。

アルフが着いた頃には大体こんな感じになつており、雰囲気的にも下手に口出し出来ない状況だった。

しかし、やはり何でこんな事になつているのか解らずクオルガへ訊く。

ちなみに、訊く相手がフェイトじゃないのは、当人が何故か落ち込んで体育座りをしているからである。

「そうだな……簡単に言つなら、近況報告と自己紹介だな」「え……？」

返ってきた応えを聞き、アルフは首を傾げる。

近況報告は分かる、こちらに来てからの細かい詳細等は向こうに送つていなかつたのだから。

だが、自己紹介とは？

その疑問に行き着いた時、アルフはハツとなり茶髪の少年を見る。そういえば、少年にもクオルガやクリアについての説明をしていなかつた……。

「そういう事だ」

アルフの反応を見たクオルガは、ため息混じりに言つ。

「さて……」

そろそろ始めるか。そう思い、頭を上げた。

すると、暗いオーラを纏い、まだ体育座りをしているフェイトの姿があつた。

「フェイト、そろそろ話を始めたいんだが？」

「ううう……クオ……まだ怒ってる……？」

どうやら先程の件でクオルガが呆れたのが原因らしい。

当の本人は別に怒っている訳ではないのだが、フェイトからはそう見えたらしい。

びくびくと、まるで様子を伺う小動物の様だ。

「怒つていなから始めるぞ」

「うん……」

恐る恐るではあるが体育座りを解き、ちゃんと椅子に座る。

「…………」

『にやけないで下さい、マスター。気持ち悪いです』

「なんだと、コラー！」

フェイトの様子を眺め顔が綻んだ少年に、少年が首に掛けている十字架のペンダント デバイスはキツイ事を言つ。

「話を始めたいんだが？」

「…………はい、すみません…………」

それに対し、少年は喧嘩腰で怒鳴り付けるが、クオルガから発せられる重い威圧感（？）に恐怖を覚え、縮こまる。

『本当にヘタレですね、マスターは…………』

そんな主を見て、少年のデバイスは更に毒を吐くのだった。

「さて……では先に、自己紹介をするか

そう言つとクオルガは少年へと向き直る。

「俺の名前はクオルガ・ヴァイサー。フェイトの兄みたいなものだ」

そこまで言つとフェイトが、顔を附せぶつぶつと何かを呟く。

「兄つて……じゃあ、クオにとつて私は妹みたいな存在つて事なの

かなあ……

少し暗くなっているフェイトを他所にクオルガは続ける。

「ちなみに、お前とはある意味同類だと思つんだが」「ツー？」

その言葉に少年は驚くものの、同時に納得した。何故、原作にはいなはずのクオルガという少年が、フェイトの仲間として『この世界』にいるのか。最初はよく分からなかつたが、これでようやく理解出来た。

それと同時に、自分をこの世界に送った自称 神が、他にも転生者がいる的な事も思い出した。

(……アンタも転生者つて事か)

その事が分かつた少年はクオルガに向けて念話を飛ばす。「生憎と、俺は念話が使えないから口で言つたわ」

「ちょ……！」

だが、クオルガは念話が使えない為口頭で応える。それに少年は驚き、慌てて止め様とする。

「心配しなくても、フェイトには既に転生者についての説明はしているぞ」

「…………はい？」

しかし、クオルガから予想外の言葉が放たれ、疑問の声を上げる。

それから、クオルガはある程度の事を少年に話した。

フェイト達に転生者について話した事。

自分以外にも、もう一人転生者がいる事。^{クリア}

自分が他の転生者とは少し異なる事。

他にも、プレシアの原作との相違や、リースの生存等についても…。

「…………」

それらを聞いた後、少年は啞然としていた。

『出遅れましたね、マスター』

「うつさいわ、ボケ！！…………て、言つか原作ブレイク?
ブレシアのフェイトに対する蟠りわだかまがなくなつてたり、リースが生存
していたり、確かにそう言えなくはない。
だが……。

「原作ブレイクか……言いたい事は分からぬでもないが、勘違い
するなよ……『此処はアニメの世界ではない』」「
は……？」

「確かに此処は似ている……だが、『似ている』というだけで『同
じ』ではない」

「？ どう違うんだ？」

少年には違いがよく分からなかつたらしい。
すると、クオルガは顎に手を当て考えた。

「そうだな……例えるなら、手書きと『コピー機だ』
「は……？」

白い紙に書かれた一本の線、それをモデルにしてみよつ。

まずは手書き。定規等を使わない、正に筆一本で書いてみる。する
と、そこに手の力の振動や紙との摩擦等が発生し、どんなに頑張つ
ても全く同じには出来ず、似ている物にしかならない。

しかし、『コピー機はどうだつ。モ^デルをセツトし、スキャンさせるだけで同じ物が出来てしまつ。

無論、過程はそんな簡単な物ではないだろつ。しかし、結果だけを見れば正にそれだ。

そして、その出来上がつた物を比べれば一目瞭然である。

『同じ』と『似ている』ではやはり違つ、それは世界にも言える事
だ。

『LJの世界』は『似ている』だけの、全く別の世界 平行世界の一つに過ぎないのだ。

「お、おおお……！」

クオルガの説明が終わると同時に少年は頭を抱え、悶え始めた。

「ど、どうしたの！？」

心配したフロイトが駆け寄る。すると、少年は痛みに耐えながらも言葉を発した。

「む……難し過ぎて、オレには分からん……！」

『…………』

《アホですね》

少年から出た言葉に皆啞然とする。そんな中、彼のデバイスだけが呆れた声を出した。

……少年の、前世での学校の成績はお世辞にも良いとは言えなかつた……。

「済まない、俺の説明が悪かつた……」

謝るクオルガだが、別に彼自身が悪い訳ではない。だが、次はちゃんと分かる様に思案する。

そして、数秒後。

「今度は、お前にも分かる様に説明する。つまり……」

考えが纏まつたらしく、少年へと改めて向き直った。

「美少女ゲームの世界に行くことは同じ一次元の存在にならなければいけないのだが、それに『限りなく近い世界』になら三次元でも行けるという事だ」

「なんだい！？ その例えは！－？！」

「よし、分かつた！！」

『え！？ 分かつたの！－？！？！』

クオルガのまさかな例えと、それで分かつたらしくキリッとした顔で親指を立てている少年に、フェイトとアルフは驚く。

『アホが増えましたかね……？』

そんな中、少年のデバイスが呟いた言葉は、誰の耳にも届かず虚しく消え入った。

六話（後書き）

誤字脱字な d (r y

オリキャラ募集をしてみたいです。

……いきなり脈絡もなくすいません……。

なのはや、はやてサイド、ついでに敵とか味方（？）の転生者やらオリキャラを募集してみたいと思います。……と言つても、ある意味試し（何の？）みたいな物なので期待はあまりせず、期限も短めに今月の12日までにしたいと思います。

ステータス等は任せますが、出来ればチート過ぎる味方キャラはなるべく控えて下さい。

Sオーバーとかは普通に大丈夫ですが、魔力無限とか異常なチート能力複数とかは本当に……。仮に出せたとして結構先になると思うんで（なのはや、はやてサイドはともかく）……それでも良いという方は、どうぞ。

……勝手な事言つてすみません、舐めた事言つてすみません。

……一応、自分でも考えたんですけど……自分がやると、なんと言いますか……キャラの方向性が同じになりそうで……流石に、それではダメだと思ったのでこんな事をしてみました。

最後に、自分の作品を見て下さった方、更にその中でもキャラ募集に多少でも興味を示して下さった方はメッセージでも感想の所もいいので、書いて下さい。
よろしくお願ひします。

六話（前書き）

頭が痛い中書いたので、おかしい所があるかもしれません。
あつたら、教えて下さい。

たぶん、この話は後で修正を入れるかもしれません……。

「と言ひ訳で、次はお前の番だ」

「何事もなかつたかの様に進めないでよ……」

何事もないかの様に、少年に自己紹介を促すクオルガだったが、そこにフェイトがツツコミを入れる。もつとも、先の一件で少し疲れた様だが……。

「おう、ようやくだな……」

そんなフェイトをスルーして、少年が咳払いをする。

「オレの名前は闇ノ神 しの……」

ドゴッ！…

少年が言い終える前に、嫌な音が部屋に響き渡った。

一人を除いた全員が、その音のした方を見る。

音の出所は少年の後ろの壁だった。よく見ると、小さい何かがめり込んでいる。

更によく見ると、それがパチンコ玉だという事が分かつた。それが煙を発て、壁にめり込んでいたのだ。

その事に気付くと同時に少年の頬から血が一滴流れ落ちた。

「悪い、手が滑った」

そんな中、何かを親指で弾いた様なポーズのままクオルガが声を出した。

どうやら、あのパチンコ玉は彼の仕業らしい。

「うおおおーーーい！？ なに危ない事してくれるんですか！」

？」

「……イタかつたら？」

主にアレ的な意味で。

「そんな理由で！？」

『『いえ、先程のはマスターが悪いです。流石の私も、正直『ないわ』と思いました』』

「マジで！？」

少年の中ではかつこいい部類に入っていたと思つていただけに、多少なりともショックを受けた。

『『もしさつきのが本気だったら、マスターのデバイスを止めていですか？』』

「え！？ ちょ、おま……じょ、冗談に決まってるだろー……ははは」

『『…………』』

少年の乾いた笑いが室内に虚しく響いた。
すると、少年の首に掛けてあつた十字架が浮き始め、少年から離れる。

『『……短い間でしたが、お世話になりました』』

「オレが悪かつたから帰つて来てええええ！！！」

開いていた窓から出て行こうとするデバイスを、必死に引き止める少年。

その光景はかなりシユールだった。

「佐藤 慎吾です。よろしくお願ひします」

デバイスを引き止める事になんとか成功し、再び自己紹介をする少年 慎吾。

その名前を聞くと、クオルガは顎に手を当て考える。

「死因は名前か？」

「リル鬼 つこじやねえよ！！」

クオルガのボケに間髪入れずツッコむ慎吾。

ちなみに慎吾の死因は、定番の『トラック転生』である。

『そして私が、マスターのデバイスの『デスサイズ』です』

「名前付けたのは慎吾だな」

『…………はい……』

今までのやり取りで慎吾がどんな部類の人間か解ったクオルガは、デバイス デスサイズに同情した。

「さて、じゃあ近況報告に移るか？」

慎吾とデスサイズの自己紹介を終えるとフェイト達に訊く。

「うん」

「ようやくかい」

それにはフェイトは頷き、アルフは早く進める様に促す。

「あれ……オレについては終わり？」

「もう、訊く事ないな。転生者なら大体の事情は分かるし」

そう言って、軽く慎吾をあしらつ。

「それでジュエルシードは？」

「その事なんだけど…………」

その後、すぐにフェイトと話し始める。偶にアルフも何か言つてくるが、どうやら真剣らしい。

「…………」

『置いてきぼりですね、マスター』

「…………うるさいやい…………」

何となく疎外感を感じた慎吾は、クオルガ達の話が終わるまで部屋の片隅でいじけていた。

七話（後書き）

誤字脱字 □ (r y)

オリキャラを投稿してくれた方、ありがとうございます。
次、募集する時は敵や味方とかかな？ 今回投稿していただけなか
つた方で興味等がある方は、出来ればその時はよろしくお願ひしま
す。

八話（前書き）

勢いだけで書いた気がします……。

ギャグを主体にしたかったけど……無理だったかな……。

クオルガがフェイト達と合流してから数日。

彼らは今、ジュエルシードの蒐集ついでにくつろいでいた。

「はあ～……いい湯だなあ～」

「そうだな～……」

頭にタオルを乗せた慎吾が、たれパダ並にたれた状態でクオルガに言つ。すると、同じくたれ状態と化しているクオルガが気の抜けた声で応えた。

クオルガ達は今、海鳴市の海鳴温泉に来ていた。

目的は勿論ジュエルシードである。

原作でもあったので、件の物があるのは既に分かっている。後は蒐集するだけなのだが……。

「はあ～……」

「い～き～か～え～る～」

アニメでは正確な場所までは分からないので、原作通り発動するまで待つ事になつた。

それまでの間、せっかくなので温泉に入つてゐる二人。ちなみに、フェイトとアルフは慎重に警戒をしている。

「よ～み～が～え～る～」

「はあ～……」

暫くの間、露天風呂に謎のたれ生物が出没していた。

「んぐ、んぐ……ふふあ～……美味しい！～」

あれから一時間、ようやく風呂から上がった一人は浴衣に着替えたと、『風呂上がりの一杯』に『例の物』を買ってイッキ飲みをしていた。

「いやあ～、やっぱ温泉来たら『コレ』でしょ！！」

そう言つて慎吾が掲げたのは、空になつた牛乳瓶。そのラベルには『フルーツ牛乳』と書かれていた。

「ふう……同感」

たつた今飲み終えたクオルガ。彼の手にも、同じく空になつた牛乳瓶が一つ。ラベルには『コーヒー牛乳』と書かれていた。

その後、二人はフェイト達を呼びに行く為動き始め、少したつた所で覚えるある声が聞こえる。

声を頼りにその場所に行つてみると、そこには浴衣に着替えたアルフが、ある少女達に絡んでいた。

「何してるんだ、アルフ」

「え……？」

少女の一人、なのはに念話で忠告していたアルフに、クオルガが声を掛ける。

それに驚いたのはアルフではなく、なのはだった。

「ク、クオ！？」

「子供に絡むな、余計な事をするな、面倒を増やすな」

クオルガを見た瞬間、アルフは嫌な汗を搔いた。そして、矢継ぎ早にクオルガの怒声を放たれた。

「だ、だつてさ……」

「言い訳は聞かない

渋るアルフにクオルガは近付き、その腕を掴む。

「へ？」

次の瞬間アルフは後ろにいた慎吾田掛けて飛んでいった。

「のわ！？」

「あう！？」

いきなりの事で反応が出来なかつた慎吾は、アルフの下敷きとなつた。

「はあ……連れが迷惑を掛けた、すまない」

アルフの件で一度ため息を吐くと、なのは達に謝罪した。

「ちよつ……クオが謝る必要なんて……」

そんな中、尚も食い付くアルフに再度クオルガが近付く。

「お前は……」

今度は浴衣の胸ぐらを掴み、柔道の投げに似た体勢をとる。

「水風呂で少しあは頭を冷やして来い、このバカ犬がッ……！」

「ひやああああああああああああああ！？！？！？」

そして、そのまま普通の子供ではあり得ない力でアルフを婦人湯へと投げ飛ばす。

『ゴン！…』といつ痛々しい音が聞こえると同時に、アルフの悲鳴は途切れた。

「本当に、悪かったな」

パンパンと軽く両の手を叩いた後、再びなのはに謝ると未だに倒れたままの慎吾を引きづり、その場を後にした。

「……なんだつたのよ……」

「や、さあ……」

残された三人と一匹は、ただただ啞然としていた。

八話（後書き）

誤字脱「」(「」)

最近、テンションだけで書いてるかも……あ、関係ないですね、ごめんなさい。

20000P超えの……（前書き）

観なくても本編とは関係ありません。

若干キャラが崩れているかも、ついでに少し早足気味かな……？

20000PV越えの……

フェイト「PVが20000を越えたので……今回も始まりました『えらてん雑談』。司会は私、フェイト・テスタロッサと……」

クオルガ「俺、クオルガ・ヴァイサーでお送りします」

フェイト「パチパチ」

クオルガ「……前と出だし同じじゃないか?」

フェイト「気にしちゃダメだよ、クオ。そんな事気にしてたり」の業界やつていけないよ!」

クオルガ「なんかキャラ変わってる!? そして業界つて何ツ!?!?」

フェイト「みんなのおかげで、この小説もPV20000、ユニーク5000を越える事が出来ました」

クオルガ「あれ? スルー……お前、そんなキャラだつけ?」

フェイト「では、さっそく本田のゲストの紹介です」

クオルガ「……何か、色々と早い気がするが、俺はツツコまないぞ」

フェイト「つい一話前に名前が発覚した、佐藤 慎吾さん」

クオルガ「意外と早いな、呼ぶの……」

フェイト「ではなく、そのデバイスの『デスサイズさん』です」

「デスサイズ《よろしくお願ひします》

クオルガ「おう、まさか使用者よりも『デバイスが先とは……どんな
チョイスだ』

フェイト「無論、作者が面白がって」

「デスサイズ《マスター……最初は喜んでいたんですけどね、それが
私宛と氣付いたら、泣いて海まで走つて行きました》

……（ ）▼

クオルガ「……哀れな……」

「フェイト「そんな事は置いといて……」

クオルガ「今日のフェイトは何かが違う……」

「フェイト「作者が行なったオリキャラ募集の結果を行います」

クオルガ「ああ……アレか」

「フェイト「『ホン……それでは発表します。採用されたのは、月光
閃火さんと空牙刹那さんのオリキャラです』」

クオルガ「まあ……出してくれたのは、事実この一人だけだからな」

デスサイズ『私達の作者じゃ仕方ないですよ……』

クオルガ「そうだな、アイツ文才ないし」

フェイト「更新遅いし……」

デスサイズ『頭が……と書つより、人として全体的にダメですからね』

……（……；）！

クオルガ「それはともかく、一人がだしてくれたオリキャラはその内本編に出てくると思うので……」

フェイト「それと、作者のオリキャラも新しく出る予定なんだって」

クオルガ「またか……」

デスサイズ『仕方ないですよ、ウチの作者がこうこうを書くと、大抵オリキャラだらけになりますから……』

クオルガ「オリキャラを募集した意味は？」

デスサイズ『似た様なキャラを出させない様に、というのが本音でしきう。作者の考えるキャラって、結構似たり寄ったりなどこがありますから』

クオルガ「……ダメだな、ホントに……」

フェイト「楽しみに待つてね」

クオルガ「今までの流れをスルーかよ……てか、楽しみに待つてくれる人いるか?」

フェイト「気にしちゃダメだよ、クオ」

デスサイズ『そりですよ、この作品眞体作者の自己満足なんですから』

クオルガ「……それを言つたら元も子も無いだろ」

フェイト「それはそりと……クオ」

クオルガ「ん……なんだ?」

フェイト「クオに質問があるんだけど……クオの名前って由来とかあるの?」

デスサイズ『それは……少し興味ありますね……』

クオルガ「なんだ? また唐突に」

フェイト「せつかくだし」

クオルガ「まあ、いいけどな……なんでも、とあるゲームで使われている古代語の単語の一つから取つたらし!」

フェイト「ゲーム?」

クオルガ「ああ。ちなみに、『ヴァイサー』の方は完全に適当らしい」

フェイト「うわあ……」

デスサイズ「さすが私達の作者。ダメダメですね……」

クオルガ「ホントにな」

フェイト「あ……そろそろ終わりの時間だね」

クオルガ「もうか?」

フェイト「今回の雑談の主な目的は募集の結果だけだから……あとは前回と同じく作者のネタ不足で……」

クオルガ「まあ、そんな物か……」

フェイト「ゴメンね、デスサイズ。せっかく来てもらつたのに質問の一つもなくて……」

デスサイズ『いえ、お気になさらず。大体予想はついてましたから
クオルガ「あのバカ（作者）だから、仕方ないと言えばそうだが……
…哀れな』

デスサイズ『大丈夫ですよ。それより、早くマスターの元に戻らないと、塵から身を投じていそうです』

クオルガ「……何故か容易に想像出来てしまつた……」

フェイト「そ、それじゃあ……何か大変な事が起きるかもしれない
ので、今回の『えらてん雑談』はこれにて終了します！ 次は50
000PVになつたら、する予定です。あと前回も言いましたが意
見や質問がある方は送つて下さい。あと、あと……」

ブツツ

20000P越えの……（後書き）

自分作のオリキャラが、またその内に……。

クオルガ「どうでもいい」

ですよね……。

九話（前書き）

暑い中若干ダウン気味で書きました……自室にエアコンなんて高価な物があると思うなー！（知るか

カシャカシャと、カメラのシャッター音が森に響く。

その音を頼りに辿つてみると、一人の少年が小川の近くで写真を撮っていた。

日本人特有の黒髪を肩まで伸ばし、青いリボンで結んでいる。歳や髪、更に顔立ちの事もあり、少女と見間違えてしまいそうになる。

「……よし」

少年の口から嬉々とした声が漏れると、小川の近くにあつた木の枝から一羽の小鳥が飛び立つ。

納得のいった物が撮れたのか、自然と顔が綻んでいた。

彼の手に収まっている一つのカメラ。一般的な黒と銀のカラーリング、年期の入った……言い替えれば古臭い物だが、『それ』は少年にとつて命の次に……いや、次の次辺りに大事な物である。

「刹那くん！」

次は何を撮るか、そんな事を考えていると、昔からよく知っている声が後ろから聞こえた。

「なのは？ どうしたんだ」

振り返つて見ると、そこには少年 栄 刹那の幼なじみ、高町 なのはがこっちに向かつて走つて來た。

「う、うん……せ、刹那君にも……教えなくちゃって、思つて……」

刹那の元にたどり着くと、息も絶え絶えにさつきあつた事を話し始めた。

「あの子の関係者か……」

なのはがアルフやクオルガ達について話し終えると、刹那は思案する。

「うん、そんな事言つてたから……たぶん」

あくまで予想なのだが、ユーノが言うにはその可能性は高いらしい。確かに、親しい仲とかじやないと投げ飛ばすなんて事はしないだろう。

ちなみに、そのユーノは只今アリサに絶賛可愛いがられていた。

「何かされたか？」

「えっと……忠告かな？」

アルフの様に投げ飛ばされたりしていいか内心不安だったが、それを聞いて一安心した。

「薰には？」

不意に、刹那はもう一人の魔法関係者の事を訊くが、なのはは首を振る。

「まだ……『ジュエルシードを探す』って、出て行つたきり……」

「そつか……」

『薰』とは、なのはと同じく刹那の幼なじみの一人である。

何故か、ユーノが来る以前からデバイスを所持し、魔法も使えていた。

その事についてユーノは疑問に思つていたが、最近立て続けに込み入り、調べる事が出来ず、結局今でも分からずじまいとなつっていた。

「一応、戻るか……」
なのはの件もそうだが、頼りになる薰がいないという事もあり、渋々楽しみだつた写真撮影を断念した。
「…………しかし、俺と同い年位で大人を投げ飛ばせる子か……少し気になるな……」

引き上げ作業と言つても、物の確認だけなのだが、を行なつてい
る際、ふと先程なのはから聞いた少年の事が気になつた。

自分も、多少なりとも武術をたしなんでいる者。『投げ』がそんなに簡単でない事は分かつてはいるつもりだ。更にそれを行なつたのが自分と同い年の少年と聞かされれば……。

「……やばい、戦つてみたいかも……！」

身体の内に燻る『何か』、溢れ出そうな衝動を必死に抑え込む。しかし、完全に抑え込む事は出来ず、口が僅かに吊り上がる。それを見たのはは、まだよく知らない仲だが、クオルガに対して心の中で謝罪した。

刹那の悪い癖が出てしまった様だ。

九話（後書き）

誤字脱字 n (r y

初めて他人のオリキャラを書いてみました……とりあえず始めはこんな感じで、後で何かが変わる可能性も……。行き当たりばつたりですから、自分…… o r z

十話（前書き）

忙しくて……一週間以上掛かってしまった。

「はぐしゅッ！！」

「だ、大丈夫、クオ？」

「ああ……。誰か噂でもしたか？」

所変わつて、フェイトと合流したクオルガは今、フェイトと共に再び温泉へと向かっている途中だった。その際にクオルガがくしゃみをし、風邪じゃないかと心配していたフェイトだが、それが『違う』と分かるとほつと胸を撫で下ろした。

ジュエルシーードの見張りは慎吾 正確には彼のデバイスのデスไซズに頼んできた。ちなみに、クオルガはそういうた魔法は出来ない。

「ねえ……クオ」

旅館へと向かう森の中、不意にフェイトが問いかける。

「ん？」

急に立ち止まつたフェイトに、クオルガは振り向きながら反応した。「訊きたい事があるんだけど……」

「なんだ？」

伏し目がちに、だがちゃんとした意思を持つて、前から気になつていた事を訊いた。

「『原作』って何？」

「は……？」

フェイトの質問の内容に暫くの間、啞然としていたクオルガだったが、ある事を思い出し納得した。

「ああ……そういえば、お前にはまだ話していなかつたな……」

「う、うん……」

“お前には”、その言葉が胸の奥に深く突き刺さった。その言葉が示す意味は、つまりフェイト以外には話したという事だ。除け者扱いされた様で、フェイトの顔に影が落ちる。

「……先に言つておくが、別に除け者にしていた訳じゃないぞ」「え……？」

その言葉にフェイトは混乱した。

なら、何故言つてくれないのか……。そう思つているとクオルガが口を開く。

「お前、以前俺に『何で色々と知つているのか』って、訊いてきたよな?」

「う、うん……」

今からおよそ二年と少し前、そんな事を訊いて怒らせてしまった事がある。

「まあ……あの頃の俺、かなりグレてたからな……結果としてお前との仲は解消出来たけど、結局“その事”に関しては話していなかつたからな……」

当時の事を思い出すと、本当に自分といつ存在が嫌になる。

「あ、あの時の事はもう気にしないよ!!　だからそんなに落ち込まないで、クオ!!」

「……すまない、フェイト」

自己嫌悪に陥つたクオルガを必死に宥めるフェイト。それに感謝しながら何とか立ち直る。

……どうやらクオルガにとつて、“あの時”的事は余り思い出しきれないらしい。

「……気を取り直して……『原作』についての説明をするか……」

「あ、うん……お願い……」

『氣分を変える』という意味でも、クオルガは話し始めた。

「えつと……つまり、私達ってアニメのキャラクターなの？」

「『前世の世界』では、な」

あらかた話しあると、首を傾げ訊き直してきたフェイイトに、補正付きでクオルガは応えた。

「実感わかないなあ……」

「まあ、そうだろうな」

上手く想像出来ないフェイイトにクオルガは苦笑する。

「あ……もしかして“コレ”も？」

「ああ、ジュエルシードの事もそれで知っている」

もつとも記憶の劣化がある為、細かい所は慎吾の方が詳しいのだろうが。

「じゃあ……この後の事も……」

知つてているのでは？ フェイイトはそう思つた。

確かに、『原作』を知つてているクオルガなら、下手な予想よりも確実だろう。

「いや

だが、返つてきたのは否定の言葉だった。

「悪いが、それは分からない」

「ど、どうして？」

『原作』を知つているなら分かるはず。そう思つていたフェイイトとは裏腹に、クオルガは理由を話し始める。

「この世界は俺の知つている『原作』から離れてしまつていいからな」

「え……？ どうこう事？」

「本来ならないはずのイレギュラーな存在がいるからな……例えば、俺やクリアとか」

転生者は本来、この世界にはいない者が多い。

クオルガを始めとしたその者達が、正史ではなかつた事を行えば歴史は簡単に変わってしまう。

「現にそれにより、俺がお前達と接触した事で、本来なら死ぬはずだつたリースが生きてたり、お前のプレシアの蟠りもなくなつた」

「…………？ それって何か問題があるの？」

端から聞けば良い様に聞こえる、だが……。

「リースはともかく、プレシアがな……」

「母さん……？」

「正史では、ジュエルシードはプレシアがアルハザードへ向かう為に集めていたんだ」

「え！？ そうなの！？」

それにフェイトは驚いた。

今のプレシアでは絶対にあり得ない事。しかし、それは『クオルガ』という異分子が入ったからであり、もしいなれば本当にそんな事を行なつていたかもしれない。

そう考えるとフェイトは心の中でクオルガに感謝した。

「まあ、脱線したが……要は俺達の様な存在がいるから先が読めないんだ。俺の知つている結末は、今のアイツじや絶対にありえないだろうから」

前世の知識だと、転生者は基本的にやりたい放題が多い。故に、先なんて読めるはずがない。

「…………クオ」

「ん…………？」

おおよその説明が終わるとフェイトが声を掛けた。

「ありがとう…………」

顔を向けた先には微小を浮かべるフェイトの姿があった。

「唐突にどうした？」

「えつと…………なんとなく、かな？」

クオルガの問いに照れながらも応える。

正直に面と向かって言うのは恥ずかしいらしい。

「ほ……ほら、クオ!! 話が終わつたんなら温泉にいこ
はあツ！？」

照れ隠しなのか、それを隠す為か、フェイトはクオルガの手を引き旅館へと向かつて走り出す。

いきなりの事でクオルガは驚く。

「いや、俺は旅館までの案内のはずなんだが?」

「気にしちゃダメだよ」

「さつき入つたばかりなんだが……」

「気にしちゃダメだよ」

「逆上せたらどうする?」

「一緒に入れば問題ないよ」

「…………」

この上なく無邪氣で微笑みながら爆弾発言をするフェイト。対して、顔を引摶らせるクオルガ。

この後、クオルガはなんとか逃げる事に成功した。

だが、その後何処で いや、どうやって知つたのか、慎吾に恨みがましくその事について訊かれ、無駄に体力やら精神を消費したのは言つまでもない。

十話（後書き）

誤字脱 (r y)

ちよつと無駄に長くなってしまったかも……。

十一話（前書き）

暑いですね～……。

毎度同じく、勢いで書きました。

十一話

時は過ぎ、深夜。

一つの過去の遺物が、ついに動き出した。

川の畔から発せられる光が、まるで柱の様に空に向かつて伸びていった。特に何も無い所で、通常ではあり得ないはず現状でも、ロストロギアなら容易に出来る。

そんな異常な事が起きている所に四つの人影があつた。

「うつは～……凄いね、こりや。コレがロストロギアのパワーってやつ?」

その内の一人 アルフがジュエルシードの威力に驚嘆する。

「アホ、これでもまだ二割の力も出していいはずだ。本当に、十

一分の力で暴走なんでしたら、此処ら一帯は簡単に吹き飛ぶぞ」

「……ホントにどんだけ凄いんだよ、ロストロギアってヤツは……」

「ジュエルシードさん、パネエツす……」

クオルガの説明を聞いたアルフと慎吾は青ざめた。

想像してしまつたのだ。もし今、本当に暴走が始まつたら……。

『うつ……』

冗談抜きで危険だと、そう感じた。

「……急いで封印しよう」

それはフェイトも同じらしく、すぐにバルディッシュを起動する。

「アルフ、サポートして」

「へいへい」

そして、フェイトはアルフと共にジュエルシードの封印を行なつた。

その様子をクオルガと慎吾は少し離れた所から見ていた。

ちなみに、フロイトと同じく一人もバリアジャケットを装備している。

クオルガはあの黒いロングコートだが、慎吾は黒いジャケットとズボンにマントを羽織っていた。

「なあ……やつきの話つて、マジ?」

「何の話だ?」

「ジュエルシードだつて……」

すると、不意に慎吾がそんな事を訊いてきた。

それに対しクオルガは面倒そうに応えた。

「一つ当たりのエネルギー量や、ジュエルシードの特性を考えるなら不可能じゃないだろ?」

「特性?」

首を傾げる慎吾に、クオルガはため息混じりにまた応える。

「……『次元干渉』だ」

「あ、そつか……。でも、そんなにヤバいか?」

『原作』を知る限り、終盤での次元震以外で危ない時はあったか、そう思い考えていたが……。

「……下手な事したら日本は終わるかもな」

「…………マジ?」

クオルガの言葉を聞き、顔が引攣る。

『危険』という事は知っていたが、その“位”が予想の斜め上を行つていた。

「ま、あくまで可能性の話だが……なんもなく」

「うッ……。その『なくもなく』つてのが怖いな……」

まだ、『絶対起きる』と言われた方が精神的にマシな気がする。もつとも、『マシな気がする』だけで、本当にそんな事になつても困るのだが……。

「終わったよ、クオ」

そんな感じで、ジュエルシードに対して改めて危機感を覚えた慎吾

を他所に、フェイトが封印に成功した。

嬉しそうに、右手に持ったジュエルシードをクオルガに見せる。

「お疲れ、後は……」

「“コレ”に入れるんだよね?』

労いの言葉の後に、次に行う事を言う前にフェイトが遮る。

バルディッシュュを待機状態に戻したフェイトは、代わりに左手に小さい黒い箱を持っていた。

「ああ」

その問いにクオルガは頷く。

「なんだい、そりや?』

箱が気になつたのか、今度はアルフがクオルガに訊く。

「それはジュエルシードを保管する為の物だ』

『『流石に、こんな危険な物をデバイスに入れるのは危ないからつて、クオがくれたんだ』

「へえ……』

淡々と言つクオルガと、嬉しそうに言つフェイト。

クオルガ自身は特に深い意味はなかつたのだが、フェイトにとつてはそう思つてくれるだけでもかなり嬉しかつたようだ。

その様子をアルフはニヤニヤしながら見ていた。

「…………』

そんなアルフの視線に気付いたクオルガは、軽く咳払いをした後、箱について説明し始めた。

「それは魔力の波長を鍵とする、ジュエルシード用に作つた特製の箱だ』

「波長……?』

「指紋とかと同じでな、魔力つてのは同じ色や性質は存在するが、波長まで同じ物はないんだ。そして、この箱は込められた魔力の波長を鍵とするんだ』

「へえ……』

フェイドが感嘆の声を漏らす。魔法についてはある程度知っていたつもりだったが、今回の事は初めて知った様だ。

この箱もクリアが作った物の一つで、小さいながらもそのセキュリティの固さや、箱その物の強度も大した物でクリアの自信作の一つである。今回はそれに加え、ジュエルシード対策に外部からの魔力や思念は通さない仕様になっている。

「あ……」

箱についての説明が終わると同時に、なのはと刹那、それからモノが現れた。

「あ～らあらあらあら、子供は良い子で言わなかつたっけかなのはを見たアルフはある程度予想出来ていたのか、挑発的に言う。「それを……ジュエルシードを一体どうする気だ！！　それは危険な物なんだ！！」

フェイドの手にあつたジュエルシードを見るとユーノはそう言い放つ。

「あ……」

そこでフェイドは慌てて小箱の蓋を開けると、その中に封印したジュエルシードを入れ、蓋を閉じた。
そして、小箱に魔力を送るとカチッと鍵が掛かつた様な音が聞こえた。

「危険、か……少なくとも、デバイスという魔法を使う道具に、その『危険な物』を入れてる奴らが言つたって、何の説得力もないと思うが」

「え……」

フェイド達より少し離れた奥にいたクオルガになのはは目を向ける。

「キミは……」

そこで言葉を放った少年が、昼間出会った彼だと気付いた。

「なのは？ 知っているのか」

そして、その反応を見た刹那がなのはに問う。

「う、うん……昼間言つていた子……」

そこまで言うと、なのはは少し後悔した。見ると刹那は不適に笑つていた。

「そうか、アイツが……」

くくく、と不気味に笑うその姿に、その場に居たほとんどの人が若干引いた。

「ヴァル！！」

その瞬間。

刹那はデバイスを起動すると同時にクオルガへと、猛スピードで向かって行つた。

「クオッ！？」

いきなりの事と、刹那のスピードが予想よりも少し速かつた事があり、フェイトの対応が僅かに遅れ、クオルガへの攻撃を許してしまふ。

刹那の刀型のデバイスが綺麗な閃を描き、身動き一つしないクオルガへと振り降ろされる。

決まつた。そう思つと同時に、予想していた程強くなかったと、落胆してしまう。

しかし、次の瞬間。彼の認識が間違つていた事が起きる。

「え？」

上げたのは疑問の声。

発したのは攻撃を行なつたはずの刹那。

なのはや慎吾も何が起きたのか理解出来ず、ただただ呆然としている。

た。

振り降ろしたはずの刹那の刀が、クオルガの頭に当たる直前、“弾き返された”のだ。

「…………」

一体何が起きたのか分からぬ刹那を他所に、クオルガはダリアを構える。

「呆けてる場合か？」

「……ツ！？」

クオルガがトリガーを引くのと、刹那が飛び退くのはほぼ同時だつた。

結果、刹那は弾には当たらなかつた。

「残念、当てる事が目的じやない」

だが、次の瞬間。

弾丸が弾けると辺り一帯を強力な光が覆つた。それこそ、目を瞑らなければいけない程の眩しさのが……。

それから暫くして、ようやく目を開けられる様になつた頃。そこには、なのはと刹那、ユーノ以外誰もいなかつた。

十一話（後書き）

誤字だ？（「？」）

上手く書けたのだろうか……心配です。
何か誤った事等がありましたら、教えて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8756/>

魔法少女リリカルなのは～選ばれなかった転生者～

2010年10月15日22時47分発行